幼児教育に思う

青木勇三

幼少時の子供達を１ヶ年清澄な田舎で思う存分遊ばせてやりたい。

― 子供の環境

今年の梅雨の頃、本学西側の土手で１匹の蛍の光を見た。農薬の制限で再び蛍の飛び交う姿が復活する兆しかなと感じたことである。本学の幼稚園では毎年阿讃山脈近くまで出かけて蛍狩りの行事をしている。一緒に行く親達が蛍狩は始めてだという人が大部分で、小供以上に大人がはしゃいでいる風景である。保育の時間にみんなで図鑑を見ていて、１人の園児が「あっ、バッタだ、この間父さんが買って来てくれた。」という。兜虫も勿論売られている。高松市という公害の余り多くない中都市で右のような有様である。

筆者も広島市の屋敷町に生れ育った者ですが、少年時代山や海、川や野に思う存分遊びまわったことが懐しく思いおこされる。川は澄みきっていたし、山は緑に映え空はあくまで青かった筈です。夏は釣をしたり水遊びをしたりしている中に、いつのまにか泳げるようになっていた。鬼ヤンマを追いかけてどこまでも足を伸したり、蟬を虫籠一杯取って夕方には母の言い付けに従ってみんな放してやったものです。

昭和の始め頃までは、世界一の大都市東京の都心部でも、子供が近所で蝶を追い草花を摘むことができたでしょう。明治14年９才で上京した島崎藤村はその２年後日本橋浜町に転居して大川（隅田川）で水泳を楽しんでいる。「武蔵野」（明治34年出版）を書いた国木田独歩は渋谷村の下宿から武蔵野に出かけている。東京市外渋谷町に住んでいた安岡章太郎氏は昭和の始め頃、道玄坂を登る扱取牛車を見ている。（自叙伝旅行）

美しい自然の破壊と消滅はここ10年来の経済大国への驀進と裏腹に急激に進行した。産業道路の建設、観光開発の進展に伴なって、自動車が氾濫して人間の歩く道を奪って、高山の頂きに、最果ての海辺にまで犇く現状である。富士スバルラインの両側の自然は無慚な姿になり、立山の雷鳥は追いつめられて姿を消そうとしている。上高地のカッパ橋は夏の数寄屋橋となっている。徳富蘆花の「思い出の記」にもでてくる兎狩りの楽しさは戦前の中学生の多くが味わい得たが今は殆んどできなくなった。

全国各地に大小無数の工場が新設増設されて工業生産は質量共に素晴しいものになった。半面夥しい公害の発生である。遅蒔ながら公害防止に意を用いようという気持になってきた。しかし公害で失われた命は甦ってこない。公害で傷ついた多くの人々が病床に呻吟して社会復帰の希望を断たれている。公害を自覚していながら尚且つ生活と闘わざるを得ない不幸な人々も夥しい数であろう。自動車の有毒な排気ガスを吾々は毎日吸わされている。交通警官や商店の人々が酸素吸入をしながら働いている所も多い。車の事故も益々ふえている。外科病院が大きくなり数が多くなることは決して有難いことではない。

空はスモッグ、山はえぐられて赤茶けた肌、海には赤潮、野には蝶も蜻蛉もいない、川はどす黒いという有様では、吾々は眼からそれを脳に伝えて如何なる精神状態になるだろ

うか。耳からは騒音、鼻からは悪臭、口からは汚染食糧というのでは、人間の生命はどうなるであろう。私は憂える。今後生れる日本人は次第に心身共に質が低下して行くのではないかと。今のままでは日本民族は亡びてしまうとさえ思われてならない。

速かに公害を除去する施策を講じて人体に悪影響をもたらさないようにしなければならない。工業地帯と住宅地域を切り離す。道路交通機関など社会資本の充実を図って、住宅は水も空気もきれいな田園に移す。今日大多数の日本人が集中して働いている場所とそれらの人が勤めを終えて家族と一緒に休養する所とを別にしたい。そして青少年の教育施設は静かな田園の中の住宅地区に置きたい。

こんなことは誰しも考えること、だがそんなことが一拳にできるものではない。環境庁ができた、公害防止産業が始まった、工場排水廃棄物に対する規制が漸次厳しくなりつゝある。といっても百年河清の感が深い。就中美しい自然の復元など不可能に近いのではないか。

二　子供を清澄な田舎へ

そこで次のような提唱をしてみたいのが今私の言いたいことである。

私の提唱は「青少年の教育期間中少なくとも１ヶ年休学して、清澄な田舎で思う存分遊ばせてやりたい。」ということである。日本の国土は７割が山岳だという。それに続く過疎地帯ができている。それは平凡ではあろうが汚れのない山里や田園であろう。名勝旧蹟は荒らされているかも知れないが、平凡な村落は遙かに多い。平凡ではあるが清らかな田舎で少くとも１ヶ年子供が自由奔放に山野渓流を駆けずりまわって心身共に健かな人間に育って欲しい。何才の時１ヶ年とは決め難いと思うが、幼年期が一番望ましいと思う。

青少年が大学卒業までストレートに進む者も多数あるだろうが、途中病気で倒れたり、精神的に躓いたり、一家の不幸に妨げられたり、受験浪人になったりで一年なり二年なり卒業の後れる者も少なくないと思われる。又折角順調に卒業しても、社会に出てから病魔におそわれる者もある。少年時代に一ヶ年田舎で呑気に遊んで、心身共に健やかになって将来十年長生きすれば、それは本人の幸福だけでなく国家社会のより一層の繁栄につながるものではないだろうか。

今日日本人の大部分が大都市に集中して暮している。その子供は外で遊び場がないからテレビにかじりつく。外で思う存分暴れられないからテレビ漫画の超人や怪獣の活躍に見入って満たされない気持を補なおうとしている。大人は獅子舞などの場面を見て、幼なき日のトン、トコトンの太鼓の音を聞きながら鎮守の森の村祭を想いうかべている。たまらなくなって団地で神輿を担ぐ行事を始める。大人は子供の時山野をかけめぐって頑丈な体力を持っているが、子供はモヤシッ子で体力持久力がない。

大人には子供の時の蓄積があるが、今の子供にはそれがない。子供は体位はのびたが無気力で公害に蝕ばまれている。次代を背負うこの子供等の時代になったらと考えると心が寒くなる。だから一年間位子供達を田舎で思いきり遊ばせて、底力のある頑健な人間にしてやりたいと思う。何才の時一斉にというわけにはいかないだろう。家庭の事情がそれを可能にする家から始めて貰う。過疎になった田舎の人に受け入れの協力を依頼する。先覚者が率先して我が子のために実践する。都市に働く父親や共稼ぎ夫婦は始めは土帰月来になるかも知れない。こうした機運が漸次拡大して行けばやがて習慣化され制度化もされる

だろう。進んでは一ヶ年に止まらないで、四季折々の休みには田舎の家へ行って更に英気を養ない一層体力の増進に努めようということにもなろう。

以上一読されて、突飛で乱暴な提唱と感じられる方も多いかと思う。でも私には今のままでは、そして生温いこれからの対策では、とても救われないという気がしてならない。民族の将来を憂え子孫の今後を思うとき、自覚した親や家庭がやろうと思えば私の提案は今すぐにでも実行できることだと思う。国家や社会がこれこれの用意をしてくれなければできないというのではない。要は個人の決心と勇気である。この父あの母そしてこちらの家庭あちらの家族と次々に田舎で子供を遊ばせることが行われれば、段々この試みが拡がって行くのではなかろうか。否そうなって欲しい。そしてすべての日本人が静かな田舎にふるさとを持つようにしたい。東京にふるさとはないという。下町にはわずかにふるさとの味に似た温かい人情が残っている。がそれすら次第に失われようとしている。大都市の大部分は子供に至るまで毎日何かに追いかけられていてイライラした気分が充満している。その子供に落ち着きを与えてやりたい。身体を丈夫にしてやりたい。ふるさとを持たせてやりたい。

このような気運になれば、国の住宅政策も変ってくるに違いない。都心に近い所に敷地が得られないから次第に周辺部の自然をくずして殺風景な団地を作る。或いは再開発と称して20階30階という高層住宅をスモッグの中に建てる。田舎で子供を遊ばせるという気運になれば、改めて過疎の廃屋を利用するという方向に住宅政策も変るだろう。狭い日本の中で尚更狭い一部都市に集中する愚をやめて、かっての時代のようになるべく国土を広く使うべきではないか。

筆がすべって脱線したことを御許し願いたい。始めの人が縁故をたどって子供を田舎へ連れて来た。3人5人と子供がふえて来た。村の子供は毎日学校へ通っているのにこの子等は朝から晩まで遊びほおけている。段々都市からの子供がふえて何等かのきまりが要求される。体力作りを最大目的としたシステムが生れて来る。村人との温かい交流融和にも努力が必要だろう。

行政上の机上プランに基づいて出発するのではなくて、あくまで我が子の将来を憂える個々の人々の発意によって事が運ばれたいと思う。やがて多くの人の共鳴実践に広がって行き、その自然の成行が行政のシステムに乗ることを期待したい。

三　結　　び

「過疎の町とふるさと縁組」と題して、46年11月1日附朝日新聞は大阪府摂津市の「市民の宿」が兵庫県大野町にできることを報じていた。国民宿舎、海の家、山の家、自然歩道など短期間の心身鍛錬の施設は漸増されている。私の提唱はそれをもつと徹底させたいのである。

少くとも一ヶ年子供を田舎で思う存分遊ばせて、心身共に真に健康な次代の日本人を育ててやりたい。ルソーは自然に帰れと言った。彼が若き日音楽家を志して作曲したと伝えられる「むすんで、ひらいて」のメロディが今も幼稚園から聞えて来る。

高松短期大学研究紀要

第　2　号

昭和47年3月1日印刷
昭和47年3月1日発行

編集発行　高松短期大学
高松市春日町

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町2158